

「階層帰属意識」の実像

統計数理研究所 坂元 慶行

(1987年11月 受付)

1. 問題はなにか

いわゆる「中流意識」をめぐる話題は様々な論議を呼び、世の耳目を集めることも多い。1977年5月から7月にかけて、村上泰亮、岸本重陳、富永健一、高畑通敏の4氏によって、朝日新聞紙上で展開された「新中間階層」をめぐる論議はその一例であり、岸本(1978)と村上(1984)はその著書の中でも所説を展開している。この論争は、世論調査でみずからの生活程度を「中」と位置づける回答者の比率が高まったことに端を発したが、争点の1つは、このような「中」意識に対応するなんらかの実体としての「中間階層」というものが実在するのか否か、ということであった。

この論争に関連して、直井(1979)は、主として岸本の所説に対する疑問点を検討する形で、「社会階層と社会移動に関する調査(1975年全国調査)」(以下、1975年SSM調査と略)の結果に基づいて「中」意識の解明を試みている。直井が分析に用いた1975年SSM調査の「階層帰属意識」とはつぎの質問である。

“ かりに現在の日本の社会全体を、この表にかいてあるように5つの層に分けるとすれば、あなた自身は、このどれに入ると思いますか。

1. 上 2. 中の上 3. 中の下 4. 下の下 5. 下の下 ”

直井は、人々がどのような判断に基づいて自己を「中」の階層に位置づけているかを明らかにするために、上の「階層帰属意識」と年齢、世帯収入、財産、学歴、従業上の地位などとの2次元クロス表をつくり、「階層帰属意識」の規定要因を経験的に検討した。その結果、従来「階層帰属意識」の規定要因として重視されてきたこのような地位変数は「階層帰属意識」を分化させる決定的要因ではないことを見だし、さらに分析を重ねたのち、「階層帰属意識」を分化させる効果が最も大きいのは、くらしむぎを豊かと思うかどうかの自己評定(「くらしむぎ」と略)であると結論づけている。ここで、「くらしむぎ」とは、

“ 現在のあなたのお宅のくらしむぎは、次の5つに分けるとすれば、どれにあたるでしょうか。

1. 非常に豊か 2. やや豊か 3. ふつう 4. やや貧しい 5. 非常に貧しい ”

という質問である。実際、「階層帰属意識」に対する回答の分布は、表1¹⁾のカッコの中の比率の動きから明らかのように、「くらしむぎ」の回答の違いによって大きく異なっている。

さらに、直井は、「必ずしも明確に述べられていないが、岸本の主張する『本当の中流』のイメージは『中産階級』のイメージであるようによみとれる」(直井(1979), p.379)として、回答者が自己を「労働者階級」・「中産階級」・「資本家階級」のいずれに評定するかを尋ねた「階級帰属意識」、殊に、その回答肢の中の「中産階級」に分析を進め、以下のような結論を得ている。「『中産階級』意識は『中』意識とは全く判断基準の異なる意識である。それは、経営者、役

表1. 「階層帰属意識」×「くらしむぎ」

		階層帰属意識			計
		1. 上, 中の上	2. 中の下	3. 下の上, 下の下	
くらし むぎ	1. 非常に豊か, やや豊か	190 (61%)	101 (33%)	19 (6%)	310 (100%)
	2. ふつう	401 (21%)	1171 (61%)	359 (19%)	1931 (100%)
	3. やや貧しい	20 (8%)	98 (39%)	136 (54%)	254 (100%)
	4. 非常に貧しい	2 (5%)	7 (18%)	29 (76%)	38 (100%)
計		613 (24%)	1377 (54%)	543 (21%)	2533 (100%)

員, 自営業主, その他の管理職者であるという事実を保守的イデオロギーにたって判断した意識であるといえる。それに加えて、『中産階級』意識の保持者はその生活程度においても『中』意識の保持者より平均的にかなり高い人びとである。(直井(1979), p. 387)

ところで, 筆者も, 1975年SSMA調査¹⁾の結果に, 最適なクロス表の自動探索のためのプログラムCATDAP-02²⁾を適用して, 直井の知見を追試した(坂元(1985), pp. 55-64)。

まず, 「階層帰属意識」のカテゴリーの区分を, 直井に対応して, 「上, 中の上」, 「中の下」, 「下の上, 下の下」の3区分とし, これを目的変数と見て, この変数に対して有効な情報をもつ説明変数を求めたところ, 効力の順は表2のようになった。この表は「くらしむぎ」が「階層帰属意識」に対して最も有効な情報をもち, 以下, 「階級帰属意識」(2位), 「所有財産の種類数」(3位), 「生活に対する満足度」(4位), 「世帯収入」(5位), ... とつづくことを示している。また, この表の4列目に示されたAICの値の差から, たとえば1位の「くらしむぎ」は2位の「階級帰属意識」に比べ, はるかに多くの情報をもつこともわかる。ここでの「所有財産の種類数」とはこの表の9位に現れる応接セット, 10位の電子レンジなど合計20項目に及ぶ耐久消費財・財産のうちいくつ所有しているかを新たに別の説明変数とみなしたものである。また, 「生活に対する満足度」とは生活全般についての満足度を5段階で評定させたもの, 等々である(富永(1979))。

要するに, 「くらしむぎ」は「世帯収入」より上位に位置し, はるかに多くの情報をもっているのである。端的にいえば, このことは, 収入がいくらかということより, その収入に対してどのような主観的な評定をしているかが「階層帰属意識」を分化させる効果が大きいことを意味する。こうして, 直井が経験をまじえた考察に基づいてくださった「階層帰属意識を分化させる効果が最も大きいのは『くらしむぎ』変数である」という先の結論と同じ結論が, CATDAP-02によっても得られたことになる。重要なことは, この結論は直井が行なった7つの説明変数のみによる検討からではなく, 72の説明変数の分析から得られたということである³⁾。このことはこの1975年SSMA調査には単独の変数として「くらしむぎ」より有効な説明変数は含まれていないことを示唆している。

さらに, CATDAP-02による多次元クロス表の分析に基づいて最適な説明変数の組み合わせを求めると, 「くらしむぎ×階級帰属意識」という2変数の組がキー項目で, 「世帯収入」は含まれないことが見いだされた。「階層帰属意識」は収入や財産等の地位変数の効果に何らかの心理的な要因が加味されて形成されるという見解がある。しかし, この結果から見る限り, 「階層帰属意識」の違いには「くらしむぎ」や「階級帰属意識」という多分に心理的な成分が関与しているとするモデルが最適として選択され, 上の見解を支持する結果を得ることはできない(5節を参照)。

つぎに, 「階級帰属意識」の規定要因を探索するために, これを目的変数とみなして再びCAT-

表2. 「階層帰属意識」と「階級帰属意識」の順位別説明要因(1975年SSMA調査)

順位	質問No.	「階層帰属意識」の順位別説明変数	カテゴリー数	AIC	「階級帰属意識」の順位別説明変数	AIC
1	Q24	(くらしむき)	4	-410.41	(所有財産の種類数)	-213.43
2	Q18B	(階級帰属意識)	3	-193.50	(本人の従業上の地位)	-180.47
3		(所有財産の種類数)	7	-152.32	(階層帰属意識)	-177.68
4	Q9-5	(生活に対する満足度)	5	-137.86	(くらしむき)	-138.27
5	Q26A	(世帯の収入)	6	-131.19	(本人の収入)	-137.69
6	Q2	(15歳時のくらしむき)	4	-116.30	(世帯の収入)	-137.35
7	Q9-3	(収入に対する満足度)	3	-95.77	(企業経営者とのつきあいの程度)	-99.94
8	Q26B	(本人の収入)	6	-84.15	(株券あるか)	-75.12
9	25-14	(応接セットあるか)	2	-68.77	(電子レンジあるか)	-69.97
10	25-7	(電子レンジあるか)	2	-66.14	(スポーツ会員権あるか)	-67.07
11	Q19B	(余暇に対する満足度)	3	-65.31	(応接セットあるか)	-64.32
12	25-6	(乗用車あるか)	2	-59.90	(エア・コンディショナーあるか)	-57.58
13	Q9-1	(仕事に対する満足度)	3	-50.18	(支持政党)	-56.54
14	Q3A	(本人の学歴)	4	-49.78	(大学の先生とのつきあいの程度)	-55.72
15	Q19-6	(国内旅行の頻度)	3	-49.10	(ゴルフ・テニスなどの頻度)	-52.11
16	Q19-2	(友人との会食の頻度)	3	-45.99	(収入に対する満足度)	-50.96
17	Q20-3	(企業経営者とのつきあいの程度)	3	-45.59	(ピアノあるか)	-49.18
18	25-18	(携帯用ラジオあるか)	2	-45.48	(15歳時のくらしむき)	-48.83
19	Q9-2	(勤め先に対する満足度)	4	-42.19	(地方議会議員とのつきあいの程度)	-46.36
20	Q20B	(つきあいに対する満足度)	4	-42.12	(地域社会での影響力の程度)	-45.92
21	Q21-1	(職場での影響力の程度)	3	-39.60	(本人の学歴)	-45.18
22	Q9-4	(学歴に対する満足度)	4	-38.62	(父の従業上の地位—経営者・役員)	-43.73
23	Q4A	(本人の従業上の地位)	6	-37.21	(貸付信託あるか)	-43.11
24	Q21-4	(地域社会での影響力の程度)	3	-36.81	(学歴に対する満足度)	-38.33
25	Q25-4	(ガス瞬間湯沸かし器あるか)	2	-36.24	(宅地あるか)	-35.85
26	Q20-1	(地方議会議員とのつきあいの程度)	3	-35.02	(自家風呂あるか)	-35.75
27	Q8-2	(性格—目標たててがんばる)	2	-34.60	(年齢)	-35.71
28	Q25-5	(カメラあるか)	2	-33.89	(セントラル・ヒーティングあるか)	-34.80
29	Q19-8	(芝居見物・コンサートなどの頻度)	3	-32.21	(職場での影響力の程度)	-32.85
30	Q20-4	(大学の先生とのつきあいの程度)	2	-30.00	(本人の職場の雇用者数)	-32.67
31	25-15	(株券あるか)	2	-28.98	(持ち家あるか)	-31.94
32	25-12	(宅地あるか)	2	-28.66	(国内旅行の頻度)	-30.03
33	Q16	(望ましい仕事の第一条件)	8	-26.22	(芝居見物・コンサートなどの頻度)	-28.63
34	Q21-3	(青年会・サークルでの影響力の程度)	2	-25.95	(電話あるか)	-28.38
35	Q21B	(仲間・会・団体の影響力に対する満足度)	3	-24.83	(ステレオあるか)	-25.90
36	25-19	(電話あるか)	2	-24.77	(父の従業上の地位—一般従業者)	-25.23
37	25-13	(持ち家あるか)	2	-21.49	(つきあいに対する満足度)	-25.05
38	Q25-1	(自家風呂あるか)	2	-20.98	(仕事に対する満足度)	-25.01
39	Q21-2	(町内会や自治会での影響力の程度)	3	-19.96	(妻の父の従業上の地位)	-23.88
40	25-17	(エア・コンディショナーあるか)	2	-19.82	(ガス瞬間湯沸かし器あるか)	-23.24
41	Q8-3	(性格—のんきに人に従う)	2	-19.42	(生活に対する満足度)	-20.58
42	Q8-1	(性格—物事に熱中し、ものにする)	2	-18.37	(本人の学歴—どこの大学)	-20.52
43	Q15	(転職に賛否)	3	-18.19	(性格—世話好き)	-20.23
44	Q25-9	(カラーテレビあるか)	2	-17.27	(性格—お山の大将好き)	-19.45
45	25-10	(スポーツ会員権あるか)	2	-17.17	(町内会などの役員とのつきあいの程度)	-18.48
46	25-11	(セントラル・ヒーティングあるか)	2	-16.82	(友人との会食の頻度)	-16.49
47	Q19-3	(ゴルフ・テニスなどの頻度)	2	-16.17	(乗用車あるか)	-16.19
48	Q3C	(本人の学歴—どこの大学)	10	-15.60	(余暇に対する満足度)	-16.14
49	Q25-8	(ピアノあるか)	2	-15.13	(望ましい仕事の第一条件)	-15.66
50	Q8-4	(性格—きままにのんびりやる主義)	2	-14.63	(海外旅行の頻度)	-15.33
51	Q22	(支持政党)	3	-14.36	(立身出世の第一条件)	-13.88
52	Q8-6	(性格—お山の大将好き)	2	-13.71	(読書の頻度)	-13.71
53	25-16	(ステレオあるか)	2	-10.97	(青年会・サークルでの影響力の程度)	-13.65
54	25-20	(貸付信託あるか)	2	-10.34	(性格—目標たててがんばる)	-13.41
55	Q19-7	(海外旅行の頻度)	2	-9.78	(カメラあるか)	-13.00
56	Q20-2	(町内会などの役員とのつきあいの程度)	2	-9.06	(町内会や自治会での影響力の程度)	-12.92
57	Q8-5	(性格—世話好き)	2	-8.69	(父の学歴)	-11.40
58	Q12	(母の学歴)	4	-8.66	(仲間・会・団体の影響力に対する満足度)	-11.35
59	Q19-5	(読書の頻度)	2	-7.86	(勤め先に対する満足度)	-10.87
60	Q19-4	(登山・ハイキングなどの頻度)	2	-7.39	(既婚か未婚か)	-8.85
61	Q1	(年齢)	8	-7.10	(転職に賛否)	-8.74
62	Q19-9	(楽器演奏・おけいこごとの頻度)	2	-5.48	(性格—のんきに人に従う)	-7.91
63	Q17	(立身出世の第一条件)	11	-1.77	(母の学歴)	-7.37
64	Q25-3	(電気冷蔵庫あるか)	2	-0.05	(携帯用ラジオあるか)	-3.79
65	Q14	(妻の父の従業上の地位)	8	0.30	(楽器演奏・おけいこごとの頻度)	-2.42
66	Q10	(父の学歴)	4	1.14	(カラーテレビあるか)	-1.98
67	Q11	(父の従業上の地位—経営者・役員)	8	1.63	(電気冷蔵庫あるか)	-1.87
68	Q19-1	(映画の頻度)	2	2.76	(性格—物事に熱中し、ものにする)	-1.73
69	Q25-2	(別荘あるか)	2	2.77	(登山・ハイキングなどの頻度)	-1.39
70	Q13	(既婚か未婚か)	5	2.85	(別荘あるか)	0.70
71	Q4F	(本人の職場の雇用者数)	2	3.11	(性格—気ままにのんびりやる主義)	0.83
72	Q11	(父の従業上の地位—一般従業者)	8	15.90	(映画の頻度)	1.82

DAP-02を適用してみた。このときの2次元クロス表の比較に基づく順位を示したものが表2の右側の欄である。この配列を左側の「階層帰属意識」の場合と対比すると、「階層帰属意識」の場合には1位であった「くらしむき」が4位に落ち、逆に、23位であった「本人の従業上の地位」が2位に浮上するというように、際立った相違が認められる。つまり「階級帰属意識」の場合には財産、地位、収入などのいわば客観的な地位を直接示す項目が上位を占めるのに対して、「階層帰属意識」の場合にはくらしむきの主観的な評定や満足度といった感覚的な項目が上位を占めているのである。したがって、既に直井が指摘したように、2つの質問の判断基準にはかなりの違いがあると考えられる。

このような現象はどの程度一般的なものであろうか。あるいはまた、日本の「階層帰属意識」は、時間的に見て、あるいは国際的に見て、どのような特質をもつのであろうか。これらの点を明らかにすることが本稿の課題である。すなわち、本稿の課題は以下のとおりである。

- ① 1955年以來のSSM調査の継続調査の結果に基づいて、「階層帰属意識」の推移を追うこと
- ② 他のいくつかの調査データに基づいて「階層帰属意識」の要因分析を行ない、①で得られた知見が他の調査でも認められるか否かを検討すること
- ③ 国際比較の観点から見て、日本の「階層帰属意識」はどのような特質をもつかを明らかにすること

なお、本稿では、特に断わらない限り、プログラムCATDAP-01, 02を用いて分析を進める。

2. 「階層帰属意識」の推移

SSM調査の調査項目は調査のたびにかなり大きく変更されており、このことが、「階層帰属意識」と他の質問項目との関係の推移を明らかにする上では大きな制約になる。そこで、本節では、1975年調査で見られた「階層帰属意識」の特質が他の時点でも見られるか、「階層帰属意識」といくつかの地位指標との関係はどう変わってきたか、という点に限って簡単に考察したい。

まず、各回のほとんど全ての調査項目を説明変数の候補とみなし、「階層帰属意識」がそれらの中のどれと強い関連をもつかを見ることによって、「階層帰属意識」の特質を明らかにしよう。

2.1 1955年SSM調査

1955年SSM調査について「階層帰属意識」の順位別説明要因を上位20位まで求めると表3の左列上段のような結果が得られる。この結果を「階級帰属意識」の説明要因の配列と対比すると、つぎのような特徴が読み取れる。

① 「階層帰属意識」も「階級帰属意識」も「自分の市町村での階層帰属意識」との関連が最も強い。特に「階層帰属意識」に対するその効果は群を抜いており、中でも、「階層帰属意識」を「下の上」以下と答える比率に対する効果が大きく、その比率は、「市区町村での階層帰属意識」の違いによって、17%から90%まで、極端に異なる。このことは、「市町村での階層帰属意識」が帰属社会階層判定上のいわば媒介変数であったことを示唆していると考えられる。

② 「世帯収入」、「学歴」、「所有財産種類数」等のいわゆる地位指標の与える効果と、意識項目の与える効果との優劣比較という点から両者を対比すると、「階層帰属意識」の場合には、これらのうち「世帯収入」が8位にはじめて顔をだし、それより上位には、①で考察した「(自分の)市町村での階層帰属意識」(1位)を初めとして、「戦争直後の(日本での)階層帰属意識」(2位)、「父の(日本での)階層帰属意識」(3位)、「戦前の(日本での)階層帰属意識」(4位)、

「祖父の（日本での）階層帰属意識」（6位）、「階級帰属意識」（7位）と、意識項目が並ぶ。これに対して、「階級帰属意識」の場合には、「所有財産種類数」が2位、対象者が属すると考えられる階層を調査員が判定した「調査員の判定による帰属階層」が3位、「従業上の地位」が6位と、地位指標がかなり上位にランクされている。

③ 「調査員の判定による帰属階層」のランクに注目すると、「階級帰属意識」の場合にはこれを凌ぐ意識項目は「市町村での階級帰属意識」だけであるのに対して、「階層帰属意識」の場合には、「父の階層帰属意識」や「戦前の階層帰属意識」といった項目がこれを上回る位置を占めている。なお、本稿では、「階級帰属意識」を目的変数とみなす場合には、そのカテゴリーの「資本家階級」と「中産階級」とをプールして一つのカテゴリーと見て処理しているが、本来のカテゴリー区分に従って、3区分の下で分析すると、表の上段の最右欄にあるように、「調査員の判定による帰属階層」は2位に上昇する。いずれにしても、調査員の評定の水準は「上」・「中の上」... 等であり、「資本家階級」・「中産階級」・「労働者階級」を評定の水準とする「階級帰属意識」とは尺度の設定法が異なるにもかかわらず、第三者の階層判定と一致しやすいのは「階級帰属意識」の方であり、本人の「階層帰属意識」は第三者の判断とは一致しにくい。調査の現場で各調査員がどのような判断基準に基づいて判断したか、その基準は統一されていたか等の問題点は残るが、この結果は、「階層帰属意識」と「階級帰属意識」との性格の違いを象徴する結果であるように思われる。

④ 最後に、多次元クロス表分析の結果によると、「階層帰属意識」の最適説明変数は「市町村での階層帰属意識 × 父の階層帰属意識 × 戦争直後の階層帰属意識」であり、「階級帰属意識」のそれは「市町村での階層帰属意識 × 所有財産種類数」である。「階層帰属意識」は主観的な階層意識だけで構成されているが、「階級帰属意識」は地位指標が加味されたものになっている。

以上の結果から、「階層帰属意識」の場合に限らず、「階級帰属意識」の場合にも、「市町村での階層帰属意識」がこの時代における帰属階層判断の核になっていたが、「階層帰属意識」の場合には特にその度合いが強く、また他の主観指標との関連も強い、と言えよう。このことから、敗戦後10年しか経っていないこの時期において、すでに、「階層帰属意識」は、地位指標や第三者の判断とは直接には結びつかない、主観的・心情的な判断基準による評定であったと考えられる。

2.2 1965年SSM調査

さらに10年後の1965年には第2回目の調査が実施された。しかし、表3の中央部にリストアップされた変数名からも推測されるように、この年の調査には他の年の調査でとりあげられているような意識項目が少ないので、「階層帰属意識」と「階級帰属意識」の性格の違いについて細かな対比分析はできない⁴⁾。

2.3 1985年SSM調査

最後に、第1節でとりあげた1975年調査から10年後の1985年調査では、どのような特徴が見られるであろうか。表3の最下段がそれについての情報を与えている。

① 「階層帰属意識」に対して「10段階で評定した階層帰属意識」が強い関連をもつのは評定の段階数を変更しただけであるから当然と言えよう。以下、この「階層帰属意識」に対しては、「階級帰属意識」を唯一の例外として、「くらしむきの世間並み度」（2位）をはじめ、生活の経済的な諸側面に対する主観的な評価が12位まで並び、事実的な地位指標は「世帯収入」がやっと13位である。

これに対して、「階級帰属意識」を目的変数とした場合には、「われわれ労働者、というとき、

表3. 「階層帰属意識」と「階級帰属意識」の説明要因(1955~1985年)

1955年 「階層帰属意識」				「階級帰属意識」			
順位	質問 No.	質問の概略	AIC	順位	質問 No.	質問の概略	AIC (3区分の順位)
1	Q27	市町村での階層帰属意識	-890.76	1	Q27	市町村での階層帰属意識	-270.28 (1位)
2	Q30	戦後の(日本での)階層帰属意識	-576.63	2		所有財産種類数	-224.20 (3位)
3	Q29	父の(日本での)階層帰属意識	-440.58	3		調査員による階層判定	-214.11 (2位)
4	Q30	戦前の(日本での)階層帰属意識	-409.69	4	Q28	階層帰属意識	-195.78 (4位)
5		調査員による階層判定	-360.16	5	Q30	戦後の(日本での)階層帰属意識	-148.64 (5位)
6	Q29	祖父の(日本での)階層帰属意識	-196.62	6	Q6	(本人の)従業上の地位	-112.06 (6位)
7	Q31	階級帰属意識	-195.78	7	Q25	世帯収入	-94.56 (8位)
8	Q25	世帯収入	-172.74	8	Q29	父の(日本での)階層帰属意識	-93.26 (7位)
9		所有財産種類数	-149.95	9	Q24	本人の収入	-87.86 (9位)
10	Q5	(本人の)学歴	-108.75	10	Q30	戦前の(日本での)階層帰属意識	-77.78 (10位)
11	Q26	株券あるか	-96.22	11	Q26	株券あるか	-75.34 (11位)
12	Q24	本人の収入	-86.00	12	Q39	支持政党	-70.31 (15位)
13	Q26	電話あるか	-75.47	13	Q26	電気冷蔵庫あるか	-69.83 (12位)
14	Q26	ミシンあるか	-70.48	14	Q26	電話あるか	-68.72 (13位)
15	Q19	妻の学歴	-65.46	15	Q26	風呂あるか	-67.50 (14位)
16	Q26	電気冷蔵庫あるか	-61.99	16	Q26	土地あるか	-64.96 (16位)
17	Q6	(本人の)従業上の地位	-39.03	17	Q26	ミシンあるか	-61.67 (17位)
18	Q13	父の学歴	-38.71	18	Q26	家屋あるか	-51.79 (18位)
19	Q6	(本人の)職場の企業規模	-26.41	19	Q5	(本人の)学歴	-40.76 (19位)
20	Q14A	父の従業上の地位	-24.74	20	Q6	(本人の)職場の企業規模	-40.10 (21位)
1965年							
順位	質問 No.	質問の概略	AIC	順位	質問 No.	質問の概略	AIC (3区分の順位)
1	Q16B	階級帰属意識	-266.65	1	Q16C	社会層	-698.51 (1位)
2	Q16C	社会層	-197.58	2	Q16A	階層帰属意識	-266.65 (2位)
3	Q9A	(本人の)学歴	-123.49	3	Q17A	支配階級に属するか	-204.46 (3位)
4	Q17A	支配階級に属するか	-115.12	4	Q10F	(本人の)従業上の地位	-136.53 (4位)
5		所有財産種類数	-113.32	5		所有財産種類数	-123.37 (5位)
6	Q34	電気掃除機あるか	-80.94	6	Q34	株券あるか	-73.34 (6位)
7	Q24	父の学歴	-73.70	7	Q14	妻の学歴	-59.27 (7位)
8	Q34	株券あるか	-58.02	8	Q9A	(本人の)学歴	-58.27 (8位)
9	Q34	電気冷蔵庫あるか	-53.73	9	Q7	支持政党	-57.33 (10位)
10	Q8A	(本人の)年齢	-43.19	10	Q34	債券あるか	-54.94 (9位)
11	Q14	妻の学歴	-42.61	11	Q18	部下の方が多いか上役が多いか	-49.30 (12位)
12	Q32	家長か否か	-40.23	12	Q8A	(本人の)年齢	-47.43 (11位)
13	Q34	家作あるか	-40.22	13	Q34	自家用車あるか	-45.81 (14位)
14	Q34	電気洗濯機あるか	-39.81	14	Q33B	本人の収入	-45.34 (13位)
15	Q10F	(本人の)従業上の地位	-39.53	15	Q10D	(本人の)職場の企業規模	-41.62 (16位)
16	Q34	債券あるか	-38.60	16	Q24	父の学歴	-38.75 (15位)
17	Q34	扇風機あるか	-35.80	17	Q33A	世帯収入	-35.92 (18位)
18	Q15F	妻の父の従業上の地位	-31.51	18	28B-F	父の従業上の地位	-35.77 (22位)
19	Q33A	世帯収入	-31.40	19	Q34	電気掃除機あるか	-34.96 (17位)
20	Q34	自家用車あるか	-31.37	20	Q34	電気冷蔵庫あるか	-34.06 (19位)
1985年							
順位	質問 No.	質問の概略	AIC	順位	質問 No.	質問の概略	AIC
1	Q13E	10段階で評定した階層帰属意識	-352.43	1	Q13C	「労働者」とは自分のことか	-959.58
2	Q21-1	くらしむぎの世間並み度	-214.33	2	Q13A	階層帰属意識	-143.69
3	Q21-3	収入の世間並み度	-199.87	3	Q13E	10段階で評定した階層帰属意識	-141.74
4	Q15-5	生活全般のゆとりはどれくらいの水準か	-164.97	4	Q25B	本人の収入	-105.44
5	Q13B	階級帰属意識	-143.69	5	Q15-1	収入はどれくらいの水準か	-91.87
6	Q21-4	貯蓄の世間並み度	-139.46	6	Q15-4	財産はどれくらいの水準か	-91.22
7	Q15-1	収入はどれくらいの水準か	-135.79	7	Q21-3	収入の世間並み度	-91.08
8	Q15-4	財産はどれくらいの水準か	-121.36	8	Q21-1	くらしむぎの世間並み度	-86.88
9	Q21-2	住宅の世間並み度	-119.40	9	Q6-3	収入満足度	-81.15
10	Q21-5	耐久消費財の世間並み度	-98.97	10	Q15-5	生活全般のゆとりはどれくらいの水準か	-78.16
11	Q13C	「労働者」とは自分のことか	-98.44	11	Q3F	(本人の)役職	-75.42
12	Q6-3	収入満足度	-98.36	12	Q25A	世帯収入	-74.87
13	Q25A	世帯収入	-90.98	13	Q21-4	貯蓄の世間並み度	-64.29
14	Q6-8	生活全般満足度	-88.78	14	Q3A	(本人の)従業上の地位	-58.52
15	Q25-8	本人の収入	-79.14	15	Q5A	(本人の)学歴	-53.56
16	Q19A	世の中の公平度	-71.82	16	22-10	株券あるか	-51.39
17	13-D2	下の層は何%いると思うか	-55.34	17	Q21-2	住宅の世間並み度	-46.97
18	Q6-1	仕事満足度	-51.81	18	Q21-5	耐久消費財の世間並み度	-44.31
19	Q15-3	職業の社会的評価はどれくらいの水準か	-47.99	19	Q15-2	学歴はどれくらいの水準か	-42.70
20	22-14	美術品・骨董品あるか	-47.78	20	Q10	妻の学歴	-36.22

自分もその中に入ると思うか否か」を尋ねた「『労働者』意識」がトップであるのは当然として、「階層帰属意識」に対しては15位であった「本人の収入」が4位へ、24位であった「本人の役職名」が11位へ、39位であった「本人の従業上の地位」が14位へ、というように、「階層帰属意識」の場合に比べて、地位変数のランクが軒並み大幅に上昇している。

② 「階層帰属意識」の要因のうち、「世間並み度」を評定させたいいくつかの項目だけに注目すると、「くらしむぎ」(2位)、「収入」(3位)がほぼ同じで、「貯蓄」(6位)、「住宅」(9位)、「耐久消費財」(10位)等より上位を占めている。また、社会的に見て自分ほどの水準に位置するかを評定させた質問の中では「生活全般のゆとり」(4位)が「収入」(7位)や「財産」(8位)より上位である。このことから、「階層帰属意識」は、特定の経済的な側面に注目した評定であるというより、経済面に関する総合的な評定であるように思われる。

こうして、この調査の結果も、「階層帰属意識」の判断基準は「階級帰属意識」の判断基準とはかなり異なり、「階層帰属意識」が、「くらしむぎ」や「生活全般のゆとり」等の用語に象徴されるような、消費生活の全般的な程度についての主観的な評定結果を表すものであることをうかがわせる。

ところで、以上の分析では説明変数の候補が調査ごとに異なるから「階層帰属意識」の規定要因の強度の推移は明らかにできない。そこで、4回の調査に共通な地位指標の中から、「世帯収入」、「学歴」、「従業上の地位」、「株券あるか」、「(電気)冷蔵庫あるか」の5項目を選び、それらの効果がどのように変わってきたかを見てみよう。各調査時期における効果を項目ごとにとまとめたものが表4であり、この表から各効果が調査時期によってどう変わってきたかを知ることができる⁵⁾。なお、この表は、有職者で、かつ、「世帯収入」に対して明確な回答のあったサンプルだけに基づいた計算結果である。したがって、AICの値はこれまでの表とは多少違うからそれらの数値と直接には比較できない。

この表からは次のような知見が得られる。

① 「階層帰属意識」に対する効果が大きいのは、これらの調査項目の中では、30年前は「世帯収入」、「学歴」、「株券あるか」の3項目、現在は「世帯収入」だけである。表のAIC値の変化量の大きさから分るように、「世帯収入」と「学歴」の効果は1965年から1975年にかけて最も大きく変化している。

② 一方、「階級帰属意識」に対して効果が大きいのは、30年前は「世帯収入」と「従業上の地位」、現在は「学歴」と「従業上の地位」である。このうち、「世帯収入」の効果はほぼ一定しているが、「学歴」と「従業上の地位」の効果は、1975年から最近時(1985年)にかけて大きな変化を見せている。

以上から、「階層帰属意識」に対する地位指標の効果は、「世帯収入」を除けば、減少傾向にあるものが多い。そして、過去30年の期間を効果の大きさによって二分する転換点を、10年ごとにしか与えられていない調査結果から、あえて求めるとすれば、1965年から1975年にかけての時期と言えそうである。

では一体、その時期とは何時か。「階層帰属意識」に対する「世帯収入」の効果の推移をより細かく検討してみよう。

図1は、各回の調査で「世帯収入」に対して明確な回答をしたサンプルだけについて、横軸に「収入分位」、縦軸に年号をとり、近接する領域では比率が滑らかに変わるという仮定の下で、「階層帰属意識」を「中の上」以上と答える比率の推定値を求め(Sakamoto and Ishiguro (1984), 坂元 (1985), 第6章), 推定値の等高線を示したものである。ここで、横軸の「収入分位」とは、回答肢のコードそのものをデータと見たものではなく、調査票のカテゴリーごとの比率の累積値を各サンプルの値と見たものであるから、0.0~1.0の値をとる。また、注釈に

表4. 「階層帰属意識」と「階級帰属意識」の地位変数効果の推移

		「階層帰属意識」	「階級帰属意識」
「世帯収入」	1955年	-173.38	-126.04
	1965年	-184.72	-116.38
	1975年	-120.98	-133.67
	1985年	-160.72	-132.17
「学歴」	1955年	-100.97	-33.08
	1965年	-103.23	-51.21
	1975年	-44.75	-62.06
	1985年	-28.92	-117.86
「従業上の地位」	1955年	-45.05	-115.40
	1965年	-55.26	-149.27
	1975年	-23.46	-177.71
	1985年	-27.01	-115.91
「株券あるか」	1955年	-100.58	-62.71
	1965年	-55.42	-63.42
	1975年	-23.60	-69.77
	1985年	-26.71	-72.38
「(電気)冷蔵庫あるか」	1955年	-59.78	-57.11
	1965年	-43.44	-24.12
	1975年	2.71	-2.15
	1985年	3.68	3.61

「階級帰属意識」	1955年	-196.88	「階層帰属意識」 -196.88
	1965年	-252.75	-252.75
	1975年	-190.41	-190.41
	1985年	-246.45	-246.45

示されているように、推定値は10段階に刻まれ、濃度が高いほど比率も大きいことを示す。したがって、等高線(縞模様)が縦に並べば、どの時期でも、「中の上」以上の比率は「収入分位」が高くなるにつれて増大することを表し、逆に、等高線が横に並べば、「収入分位」によらず、比率は時期とともに変わること示す。また、等高線が逆対角線状に並べば、時期と「収入分位」の上昇とともに、比率が増大することを示す。図1は、放射状にカーブを描いてはいるが、大まかに言えば、この最後のケースに近い。しかし、より細かく言えば、1974年頃を境にして、表の上下で様相が異なり、上部は縦縞型、下部は放射型と見ることができる。つまり、1974年頃までは時期と「収入分位」の上昇との双方に依存して「中の上」以上の比率が増えてきた、つまり「収入分位」は上がらなくても「階層帰属意識」は時代とともに上昇するという関係が見られたが、オイル・ショックに当る1974年頃から、「階層帰属意識」は「収入分位」のみに依存するようになってきたことになる。換言すれば、このことは、「中の上」以上という意見に与える「収入分位」の効果は、1974年後に構造を変え、以後は定常な状態を続けているということになる。これが「収入分位」効果の飽和状態を意味するのかどうかは今後の推移にまたざるを得ない。

して、何時からかは明らかでないが、「階層帰属意識」は、「くらしむき」や「生活全般のゆとり」等の用語に象徴されるように、個人の生活の経済的な面についての主観的な総合判断に強く傾斜した評定であると考えられる。

3. 「階層帰属意識」の諸相

周知のように、意識や態度の調査結果は調査方法、殊に質問法に強く依存する。ここでいう質問法とは、調査票に盛られた個々の質問の内容ばかりではなく、その配列の仕方などを含めた、質問の仕方・回答のとり方のことである。特定の調査の結果は、厳密に言えば、そのままでは一般化できない、その調査に固有の結果とでも言うべきものである。この意味で第2節の知見もSSM調査という特殊な性格をもった調査に固有のもので、「階層帰属意識」も別の文脈の調査票の下ではまた違った貌を見せるかもしれないという懸念が残る。本稿で調査項目を一貫してカッコつきで表示してきたのも、実は、このような事情を考慮したからにほかならない。そこで、本節では、ほとんど同時期に実施されたいくつかの最近の調査データを用いて、種々の文脈の下での「階層帰属意識」の説明要因を比較し、第2節の知見が他の調査でも認められるか否かについて検討してみたい。

3.1 1981年東京定期調査

まず、政治的・社会的な時事問題に対する都民の意見変化の把握を主目的とする「東京定期調査」⁶⁾の1981年末の調査には、「階層帰属意識」と「階級帰属意識」とが同時に調査項目として採用されている。そこで、このデータを利用して、第2節までと同様の「階層帰属意識」の「階級帰属意識」との対比分析を行なうことができる。CATDAP-02をこの調査に適用すると、「階層帰属意識」に対する効果は、1975年SSM調査と同じ「くらしむき」が群を抜いて1位(AICは-167.02)、以下、「階級帰属意識」(2位、AICは-97.46)、「世帯の収入は世間並みにふえたか」(3位)、「自分の生活にどの程度満足か」(4位)、「毎日の生活でどの程度経済的な不安を感じるか」(5位)、「応接セットあるか」(6位)等と続くが、3位以下は効果そのものがそれほど大きくない。このほか、主な属性項目の順位を挙げると、「世帯主の従業上の地位」はこのすぐ後の7位、「世帯収入(21段階評価)」は9位、「学歴」は12位、「支持政党」は23位、等となっている。なお、多次元クロス表の分析では、単変数として1位であった「くらしむき」と2位の「階級帰属意識」の組み合わせが上位のモデルに共通に含まれ、キー項目になっており、この結果も1975年SSM調査と全く同じである。また、「くらしむき」が群を抜いて1位という事情は1年後の「東京定期調査」でも変わらない。

これに対して、「階級帰属意識」の場合には、「階層帰属意識」では1位であった「くらしむき」が3位に落ち、7位であった「世帯主の従業上の地位」が2位に上がっている。また、この場合の多次元の説明変数としては「階層帰属意識 × 従業上の地位 × 衆議院での与野党の望ましい議席比」がキー項目になっている。ここで、「衆議院での与野党の望ましい議席比」が含まれることは、「階級帰属意識」の要因として政治意識が加味されるべきであることを示唆しているのかもしれない。もしそうであるとすれば、第1節で引用した、「階級帰属意識」についての直井の性格規定と奇しくも符合することになるとも考えられるが、これだけで明言することはできず、今後の検討を要しよう。ともあれ、この場合の単変数としてのトップは「階層帰属意識」(当然、AICは「階級帰属意識」が目的変数の場合と同じく-97.46)であるが、これは「階層帰属意識」を目的変数としたときには2位であったから、「くらしむき」の「階層帰属意識」に対する効果の大きさがこのことから推測されよう。実際、クロス表で見ても、たとえば「階

層帰属意識」を「中の上」以上と答えた比率は、「くらしむぎ」が「やや豊か」以上の回答グループの71%から「やや貧しい」以下のグループの4%まで、極端に違う。「くらしむぎ」によるこの「階層帰属意識」の分化の度合いは1975年SSM調査よりさらに大きいのである。結局、全国の成人男子を対象とした1975年のSSM調査とは対象者も調査地域も違うが、1975年SSM調査から6年後の東京区部における政治意識を中心としたこの調査においても、1975年SSM調査で見られた現象とほとんど同一の「階層帰属意識」と「階級帰属意識」の意識構造の違いが、一層増幅された形で、再認識されたと言ってよい。

3.2 1983年日本人の国民性調査

つぎに、日本人の態度や価値観の特質を明らかにするために、統計数理研究所が、1953年以降、5年おきに実施している「日本人の国民性調査」⁷⁾には、最近時(1983年)の調査で初めて「階層帰属意識」の質問が採用された。この調査の質問項目の性格から、「階層帰属意識」と他の項目との関連は全般に弱い。主として調査開始時からの継続質問で構成されたA調査票の結果によると、「階層帰属意識」の上位の説明要因は、「家庭にどの程度満足か」(1位)、「社会にどの程度満足か」(2位)がほとんど同じ程度で、以下、これらとは効果に開きがあるが、「学歴」(3位)、「応接セットあるか」(4位)と続いている。一方、比較的最近の価値観に対する態度を追うために併設したB調査票の結果によると、「自己の生活水準は10年間でどの程度変わったか」が1位で、A調査との共通項目「社会にどの程度満足か」が3位、以下は効果そのものも落ちて、「応接セットあるか」が6位、「学歴」は7位である。因に、1位の質問と対の質問「日本人全体の生活水準は10年間でどの程度変わったか」は10位である。この結果から、「学歴」は「応接セットあるか」⁸⁾と同程度の効果しかなく、社会に対する満足度がそれを上回り、自己の生活水準の向上についての評価や家庭に対する満足度がさらにそれを上回る効果をもつと言ってよい。とはいえ、最初に指摘したとおり、この調査における効果は全般に低位である。実際、たとえば、以上の中で最も効果の大きいB調査の1位の「自己の生活水準は10年間でどの程度変わったか」は、主として、「階層帰属意識」を「中の下」以下とする比率の違いに寄与するが、この比率でさえ、自分の生活水準の変化の評価の違いによって40%程度しか違わない。この結果から、「階層帰属意識」は、自己の「生活水準」が向上したかどうかという上昇感や、ある種の満足感ともある程度の関連はもつようである。

3.3 1984年価値意識調査

ある種の満足感とはどのような満足感か、また、生活水準(あるいは、くらしむぎ)の上昇感(いわば変化率についての感覚)と現状評価とでは、どちらが「階層帰属意識」と関係が深いのであろうか。

これらの問題に対する一応の解答は、上の1983年の「日本人の国民性調査」の数ヶ月後に、新しい価値観の把握という目的で、関東地方で実施した「価値意識調査」⁹⁾が与えてくれる。この調査に含まれているのは「階層帰属意識」のみであるが、この場合の規定要因は、「自分のくらしむぎに対してどの程度満足か」(「くらしむぎ満足度」と略、AICは-150.34)、「自分のくらしむぎは10年間でどの程度変わったか」(2位、同-125.02)、「所有財産の種類数(11個中の)」(3位、同-118.52)、「自分の生活全般にどの程度満足か」(4位、同-114.39)と並んでいる。これらに比して、以下の項目は効果が格段に落ちるが、「応接セットあるか」、「今後5年間にくらしむぎはよくなると思うか」と続き、前項に現れた「社会にどの程度満足か」は11位と低位である。また、多次元の説明変数としては、単変数で1位の「くらしむぎ満足度」と3位の「所有財産の種類数」の組み合わせがトップである。この結果は、この調査には「くらしむ

き」や「階級帰属意識」という項目がないため、その代替項目が挙がっているようにも見える。

ところで、この調査には「家庭にどの程度満足か」という質問もないからその効果の正確な比定はできない。しかし、仕事や職場・自分のくらしむき・余暇の過ごし方・人とのつきあい・生活全般等、日常生活をいろいろな局面に分けて、個々に満足度を聞いており、先に見たとおり、この中の「くらしむき満足度」が他の全ての項目を含めてもトップである。つまり、社会満足度では勿論なく、生活全般の満足度でもなく、くらしむきについての満足度が「階層帰属意識」に対して大きい効果をもつのである。実際の数値を挙げると、たとえば「階層帰属意識」が「中の下」以下の比率は、くらしむきに「満足である」グループでの17%から「不満である」グループでの67%へと、大きく異なっているのである。なお、この調査には、1975年SSM調査と同一の、くらしむきの豊かさを聞いた「くらしむき」は採用されていないので、この項目の分析はできないが、しかし1975年SSM調査で「くらしむき」より効果の弱かった「くらしむき満足度」でさえ、「くらしむきの上昇感」や「くらしむきの将来予想」を押さえている。したがって、満足度の中でも局面別に言えば「くらしむき」が、「過去や将来との対比」か「現状評価」かと言えば「現状評価」が、「階層帰属意識」に対して、より大きい効果をもつと言ってよいだろう。

3.4 1983年消費者の行動と意識調査

消費生活に関するさまざまな調査項目の中には、この「くらしむき満足度」を凌ぐ有効性をもつ説明変数があるのではなからうか。最後に、この種の質問を豊富に盛り込んだ日本経済新聞社・日本消費経済研究所の1983年6月の調査データ¹⁰⁾によってこの点を見ておきたい。この調査は、消費に関わる価値感、景況判断、家計の現況とその評価、具体的な消費計画と消費行動、年収・貯蓄・生活費・住宅状況・住宅購入計画等を含む詳細な属性項目等について調べている。にもかかわらず、またしても、「くらしむきに対してどの程度満足か」が断然トップで、「世帯収入」(2位)、「応接セットあるか」(3位)、「世帯の月間生活費」(4位)、「貯蓄実績額の対年収比」(5位)等々、残りの全項目を圧している。しかも、この1位と2位は1年後の1984年6月の調査でも全く変わらず、3位以下が若干変動する程度である。つまり、「くらしむき満足度」の効果は「世帯年収」、「貯蓄総額」、「貯蓄率」等、家計の状況を直接表示する変数¹¹⁾を全て凌駕しているのである。こうして、少なくともこの2回の調査からは、「階層帰属意識」は、家計の状況、要するに貧富の差に依存して分化するというより、それに対する主観的な評定に依存して分化していると考えられる。

以上、本節では、大きく分けて、時事問題、価値観、消費行動を中心とする3種類の調査に基づいて、「階層帰属意識」の関連要因を検討してきた。これらの結果を要約すると、どちらがより有効かを直接比較することはできなかったが、「くらしむき」や「くらしむき満足度」の「階層帰属意識」に対する効果は、他の経済的・社会的な地位項目に比べ、調査によらず、抜群であるというに尽きる。「階層帰属意識」と「階級帰属意識」との内実の違いはここでも歴然としており、「階級帰属意識」との対比で言えば、「階層帰属意識」は実態の表示というより、その主観的・心情的な表現にはるかに近いのである。

4. 「階層帰属意識」の国際比較

本稿の冒頭でも触れたように、「階層帰属意識」が人々の関心を集めるようになったのは、自らを「中」ないしはそれ以上と評定する人の割合が高まり、それが日本人の経済生活の向上を証明したものであるかのようなイメージを与えたことにあると思われる。しかし、たとえば、

1980年国際価値会議事務局(1980)は、「13カ国価値観調査(1979年調査)」¹²⁾に基づいて、「13カ国価値観調査データ・ブック」の中で、つぎのように指摘している。「これまで日本人の9割までが、『中流意識』であるといわれてきたが、今回の国際比較調査によれば、『中流意識』は世界的傾向であり、日本だけに特別にみられる現象ではない。(中略)上, 中の上, 中の中と考える人の比率をみると、日本が約70%であるのに対し、フィリピン、インドでは各々75%, 71%と日本を上回っている。」(1980年国際価値会議事務局(1980), p.10)。

この記述は必ずしも「階層帰属意識」の内実まで言及したものではないと思われるが、しかし一面では、その内実も国によって大差ないと述べているかのような印象を与える。はたしてそうであろうか。この意識の内実までも国によって異なるのであろうか。本節では、この「13カ国価値観調査」のデータに基づいて、この点について検討してみよう。

「13カ国価値観調査」は、幸福感、「階層帰属意識」、政治的態度、人生観、生活領域ごとの欲求充足度・満足度、家族観、社会への関心度、宗教観、財の保有率と必要度、余暇活動、基本的属性等に関する質問項目から成っている。ここでは、全ての調査項目をとりあげ、「階層帰属意識」を目的変数、残り273項目(複数回答は各回答肢ごとに1問扱い)を説明変数の候補とみなして、国別にCATDAP-02を適用してみた。国ごとの上位10位までの説明変数のタイト

表5. 「階層帰属意識」の説明要因(13カ国比較)

1. 日本 (1574)			2. 韓国 (997)		
順位	質 問	AIC	順位	質 問	AIC
1	いまの生活はどの程度幸せか	-110.95 (3)	①	収 入	-154.50 (1)
2	満足できる水準にあるものは? — 経済的に豊かにくらすこと	-95.65 (5)	②	所有, 経験項目は? — 洗濯機	-138.46 (2)
3	家庭生活にどの程度満足か	-90.76 (4)	③	所有, 経験項目は? — ステレオ	-122.71 (4)
4	全体的にいて、いまの生活にどの程度満足か	-81.74 (1)	④	所有, 経験項目は? — ガス	-118.47 (3)
⑤	収 入	-77.21 (2)	⑤	所有, 経験項目は? — ピアノ	-111.71 (5)
6	レジャー生活のさまたげは何か? — 収入不足	-76.00 (7)	⑥	所有, 経験項目は? — 風呂	-105.81 (6)
⑦	所有, 経験項目は? — 一流レストランでの食事(家族で)	-75.76 (6)	⑦	学 歴	-100.45 (7)
8	満足しているものをあげよ — 衣生活	-62.99 (9)	⑧	所有, 経験項目は? — 電話	-94.71 (8)
9	毎日の生活は面白い	-57.88 (8)	9	満足しているものをあげよ — 住生活	-94.07 (12)
10	何割の収入の増加をのぞむか	-53.57 (11)	⑩	所有, 経験項目は? — 冷蔵庫	-92.70 (11)
3. フィリピン (996)			4. シンガポール (1006)		
順位	質 問	AIC	順位	質 問	AIC
①	収 入	-100.20 (1)	①	所有, 経験項目は? — クレジットカード	-50.19 (1)
②	所有, 経験項目は? — テレビ	-83.16 (2)	②	本人の職業	-44.29 (4)
③	学 歴	-75.54 (3)	③	収 入	-38.23 (2)
④	所有, 経験項目は? — 冷蔵庫	-64.67 (4)	④	所有, 経験項目は? — オープン	-33.74 (3)
⑤	所有, 経験項目は? — 水道	-62.66 (5)	⑤	所有, 経験項目は? — 外国旅行	-29.89 (7)
⑥	所有, 経験項目は? — ステレオ	-57.17 (6)	⑥	所有, 経験項目は? — 風呂	-29.09 (6)
7	満足しているものをあげよ — 将来の生活に対する備え	-53.27 (7)	⑦	学 歴	-28.11 (5)
8	毎日の生活は面白い	-52.01 (8)	8	人生にどの程度希望をもっているか	-24.82 (8)
⑨	親の職業	-50.71 (26)	9	いまの生活はどの程度幸せか	-24.48 (11)
⑩	所有, 経験項目は? — 下水道	-49.73 (13)	⑩	所有, 経験項目は? — 掃除機	-24.35 (10)
5. インド (1000)			6. フランス (993)		
順位	質 問	AIC	順位	質 問	AIC
①	収 入	-278.69 (1)	①	収 入	-130.76 (1)
2	レジャー生活のさまたげは何か? — 収入不足	-170.11 (2)	②	学 歴	-93.53 (3)
3	いまの生活はどの程度幸せか	-154.28 (3)	3	生活にハリを感じるか	-91.39 (2)
4	生活にハリを感じるか	-149.75 (4)	④	本人の職業	-78.73 (4)
⑤	学 歴	-136.72 (5)	⑤	親の職業	-70.81 (30)
6	全体的にいて、いまの生活にどの程度満足か	-123.81 (6)	⑥	所有, 経験項目は? — 宝石	-58.75 (13)
7	満足しているものをあげよ — 衣生活	-121.65 (7)	⑦	所有, 経験項目は? — 毛皮	-55.61 (5)
8	仕事にどの程度満足か	-121.36 (8)	⑧	所有, 経験項目は? — 風呂	-52.22 (6)
9	家庭生活にどの程度満足か	-116.81 (9)	9	いまの生活はどの程度幸せか	-52.12 (17)
10	満足しているものをあげよ — 食生活	-113.33 (10)	⑩	所有, 経験項目は? — 一流レストランでの食事(家族で)	-47.72 (8)

7. ドイツ (1020)		(868)	8. イタリア (1042)		(987)		
順位	質 問	AIC	順位	質 問	AIC		
①	所有, 経験項目は? — 一流レストランでの食事(家族で)	-133.38	(2)	① 収 入	-214.16	(1)	
②	親の職業	-97.99	(11)	② 学 歴	-102.67	(2)	
③	所有, 経験項目は? — ステレオ	-87.33	(4)	③ 本人の職業	-88.25	(6)	
④	学 歴	-85.66	(3)	④ 所有, 経験項目は? — 掃除機	-81.45	(3)	
⑤	本人の職業	-71.63	(9)	⑤ 所有, 経験項目は? — セカンドカー	-69.75	(4)	
⑥	所有, 経験項目は? — クレジットカード	-65.85	(5)	⑥ 所有, 経験項目は? — 電話	-61.51	(5)	
⑦	所有, 経験項目は? — 毛皮	-65.24	(14)	7 レジャー生活のさまたげは何か? — 収入不足	-59.74	(7)	
8	自由な時間はどのようにすごすか — 外国旅行	-64.85	(6)	⑧ 所有, 経験項目は? — 国内旅行	-47.12	(8)	
⑨	収 入	-61.70	(1)	⑨ 親の職業	-46.63	(36)	
⑩	所有, 経験項目は? — 外国旅行	-60.90	(12)	⑩ 所有, 経験項目は? — セントラルヒーティング	-43.50	(9)	
9. イギリス (987)			(534)	10. カナダ (1012)			(902)
順位	質 問	AIC	順位	質 問	AIC		
1	所有, 経験項目は? — 現在住んでいる土地	-76.76	(1)	① 収 入	-103.65	(1)	
②	本人の職業	-59.82	(9)	2 レジャー生活のさまたげは何か? — 収入不足	-59.32	(2)	
③	親の職業	-58.71	(6)	③ 所有, 経験項目は? — 一流レストランでの食事(家族で)	-55.20	(3)	
④	所有, 経験項目は? — 電話	-38.74	(13)	4 満足しているものをあげよ — 将来の生活に対する備え	-48.85	(4)	
⑤	所有, 経験項目は? — セカンドカー	-34.68	(11)	⑤ 所有, 経験項目は? — 宝石	-47.46	(6)	
⑥	所有, 経験項目は? — クレジットカード	-27.13	(8)	6 満足できる水準にあるものは? — 社会的に成功を取めること	-45.16	(5)	
7	自由な時間はどのようにすごすか — 団体・奉仕活動	-25.90	(30)	⑦ 学 歴	-40.96	(8)	
⑧	所有, 経験項目は? — ホームパーティ	-23.04	(4)	⑧ 所有, 経験項目は? — シャワー	-40.93	(7)	
⑨	所有, 経験項目は? — セントラルヒーティング	-21.89	(10)	9 満足できる水準にあるものは? — 豊かな知性的生活を送ること	-37.48	(10)	
⑩	所有, 経験項目は? — ピアノ	-21.79	(34)	⑩ 本人の職業	-37.42	(72)	
11. アメリカ (1127)			(999)	12. ブラジル (1000)			(860)
順位	質 問	AIC	順位	質 問	AIC		
①	収 入	-108.51	(1)	① 収 入	-57.40	(1)	
②	所有, 経験項目は? — 預金	-73.34	(3)	② 所有, 経験項目は? — 一流レストランでの食事(家族で)	-30.41	(4)	
③	所有, 経験項目は? — 一流レストランでの食事(家族で)	-69.78	(2)	③ 所有, 経験項目は? — 国内旅行	-28.10	(3)	
4	レジャー生活のさまたげは何か? — 収入不足	-66.45	(4)	④ 所有, 経験項目は? — ステレオ	-22.45	(2)	
⑤	満足できる水準にあるものは? — 社会的に成功を取めること	-55.82	(5)	5 自由な時間はどのようにすごすか — 友人・知人とのつきあい	-21.22	(5)	
⑥	所有, 経験項目は? — クラブ会員券	-53.85	(7)	6 満足できる水準にあるものは? — 経済的に豊かにくらすこと	-19.35	(12)	
⑦	所有, 経験項目は? — 宝石	-52.95	(6)	⑦ 学 歴	-18.12	(9)	
⑧	学 歴	-48.29	(8)	⑧ 所有, 経験項目は? — カラーテレビ	-18.08	(6)	
9	満足しているものをあげよ — 将来の生活に対する備え	-44.09	(12)	⑨ 所有, 経験項目は? — セカンドカー	-17.13	(7)	
10	全体的にいて、いまの生活にどの程度満足か	-43.43	(11)	10 レジャー生活のさまたげは何か? — 収入不足	-16.94	(8)	
13. オーストラリア (1104)			(915)				
順位	質 問	AIC					
①	収 入	-38.79	(1)				
2	毎日の生活は面白い	-36.72	(2)				
3	生活にハリを感じる	-32.17	(3)				
④	学 歴	-31.20	(8)				
5	レジャー生活のさまたげは何か? — 収入不足	-30.15	(5)				
6	全体的にいて、いまの生活にどの程度満足か	-26.46	(4)				
7	将来、食費をいまの何割程度ふやしたいか	-23.67	(10)				
8	人生にどの程度希望をもっているか	-23.28	(9)				
⑨	所有, 経験項目は? — 子供の高等教育	-21.69	(7)				
⑩	所有, 経験項目は? — 預金	-21.26	(6)				

注) 表頭右端の()内の数値は「階層帰属意識」もしくは「収入」に対する無答を除いたサンプル数

ルのみを示せば表5のとおりである。

この表に見られるように、日本では、「いまの生活はどの程度幸せか」、「すでに満足できる水準にあるものは? — 経済的に豊かにくらすこと」、「家庭生活にどの程度満足か」、「全体的に

いて、いまの生活にどの程度満足か」の順に並んでおり、収入はやっと第5位である。AICの値が格段に違うというほどではないが、幸福感や生活満足感のランクが収入のそのもののランクを上回っている点が注目される。この結果はこれまでの分析結果と矛盾するものではなく、むしろ整合的であると言ってよい。

これに対して、国によって効力に多少の強弱はあるが、韓国、フィリピン、インド、フランス、イタリア、カナダ、アメリカ、ブラジル、オーストラリアの、合わせて9カ国では「収入」が1位を占めている。残りの3カ国でも、シンガポールでは「クレジットカードを持っているか否か」、「職業」、「収入」の順、ドイツでは「家族で一流レストランで食事の経験があるか否か」、「親の職業」、「ステレオを持っているか否か」の順、イギリスでは「土地を持っているか否か」、「職業」、「親の職業」の順となっている。なお、イギリスでは「階層帰属意識」の設問において「下」という回答肢が使われず、working class とされたため、他の国ではこの回答肢の選択率が10%以下であるのに対し、イギリスでは42.5%と極端に大きく、この意味で比較上問題があるので、ここでは参考記録として取り扱いたい。

ところで、この表の順位での○印は、収入、職業、学歴、消費財の所有・非所有等、事実に関する質問項目を示す。この○印は、分類が不正確な場合もあるが、第三者の努力によって回答の真偽の検証が可能か否かという観点から、一応の目安として付けたものである。これによると、多少の程度の差はあるが、日本とインドを除く11カ国では○印が極めて多く、この観点から見ても、日本、インドとそれ以外の国では明らかな差がある。さらに、質問番号の下線は最適多次元クロス表に採択された項目を表す。これを見ても、どの国でも、最適組み合わせは単変数としてトップを占めた項目と2位以下の項目のうちいくつかとで構成されているから、単変数の分析で得られた知見はおおむね多次元分析の結果にも妥当し、諸外国の「階層帰属意識」は地位変数の効果に意識項目の効果が加味されて形成されていると見てよいであろう。なお、この表の項目名の横のカッコ中の数値は、「階層帰属意識」や「収入」で明確な回答をしなかった回答者を除外したサンプルでの順位を示している。しかし、このようにサンプルを制限しても、全サンプルの場合と比べて「収入」の効果が一般的に強まる傾向は認められるものの、上で得られた結論に大きな修正を施す必要はないようである。

いずれにしても、日本以外の国々においては、収入、職業、財産や耐久消費財の有無等、経済的・社会的地位に直接関わる指標が「階層帰属意識」に対して大きい効果をもち、価値観、満足感のような意識項目は副次的な効果しかもたず、日本のように漠然とした幸福感や満足感がトップ・グループを占めることはない。とはいえ、この結果は、収入の「階層帰属意識」に対する効果は日本より諸外国の方が大きい、ということをも必ずしも意味しない。図2は、国別に、「中の上」以上と答えた百分率を収入階級別（5区分）に求め、その最大値と最小値を、その範囲（レンジ）の大きい順に図示したものである。この図から見る限り、日本は中位に位置しており、必ずしも諸外国における効果より劣るとは言えない。したがって、諸外国では「階層帰属意識」が現実の経済的・社会的地位に強く規定されるのに対し日本ではそうではないというより、むしろ、諸外国では「階層帰属意識」の有力な要因として現実の経済的・社会的地位変数以外の項目は見いだせなかったが、日本では幸福感や満足感のような心理要因がそれ以上の効果をもつ、と言う方がより正確であろう。

世論調査は特定の問題や対象に対する回答者の見方や意見を尋ねたものであるから、その結果の国による違いは、大別すると、① 対象そのものの構造の相違、② 調査法の相違、③ 個人の感覚や感じ方の相違、という3つの要因によってもたらされると考えられる。ここでの問題に即して言えば、①は収入を初めとする社会経済構造の国による違いであり、②は質問文やサンプリングの違いであり¹²⁾、③は「階層帰属意識」についての感覚の違いである。「階層帰属

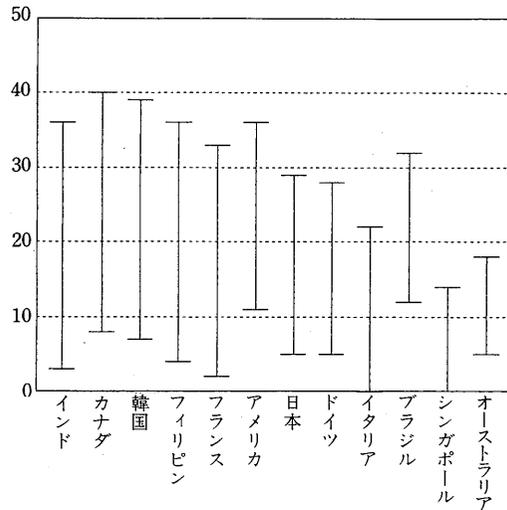


図2. 収入による「階層帰属意識」の隔差 (13カ国比較)

意識」についての上の結果はこれらのどの要因とも無関係ではなく、それらが複合されてもたらされたものと考えられる。しかし、②の問題を除いて考えるとしても、日本に特徴的な結果について、つぎのような解釈が可能であろう。① 外国に比べ、日本の社会経済構造は等質的で、このため「階層帰属意識」に対する地位変数の効果が相対的に小さい、② 日本の社会経済構造も等質的ではないが、日本人は経済的・社会的諸条件とは独立に「階層帰属意識」を評定できるという独得の感覚をもつ、③ 質問すれば回答は得られるものの、上・中・下という「階層帰属意識」そのものが社会性や切実感の薄い感覚である（したがって経済的・社会的条件などとはそもそも関係ない）、等々である。これらのいずれが上述の結果をもたらした主因であるかについては今後の検討にまつ以外にない。このような事情を考慮すれば、1回限りの調査結果の分析から多くの結論を引きだすことは危険であろう。しかし、それにもかかわらず、本節冒頭に引用した、「今回の国際比較調査によれば、『中流意識』は世界的傾向であり、日本だけに特別にみられる現象ではない」という「13カ国価値観調査データ・ブック」の指摘は、いわゆる「中流意識」そのものの選択率については妥当するにしても、その意識の内実には、日本と諸外国とで、かなりの差異があるのではないかと考えられる。ともあれ、筆者には、本節で得られた日本に特徴的な調査結果は、それ自体が日本人に特有な考え方の一端を示唆したものであると同時に、日本においては、事実的な地位指標だけではなく、「階層帰属意識」や満足感のような主観的な指標が、意識構造を解明する上で、独自の存在理由をもつことを示しているように思えてならない。

5. 結びにかえて

これまでの考察から、現在の日本において「階層帰属意識」を分化させる要因は、くらしむきの豊かさや、くらしむきに対する満足度のような、個人の生活の経済面に対する主観的・感情的な評価であると言ってよいと考えられる。そして、この特徴はおそらく戦後のかなり長い期間にわたって共通に見られたものと思われる。また、日本人から見れば、ごく当然と思われるこの現象は、国際的な観点からは決して当然の現象ではなく、日本の特質ではないかと考え

られる。

しかし、それにもかかわらず、以上の知見は留保せざるを得ない部分を含んでいる。というのは、これまでの知見は、一見、時間的な推移を追った分析に基づいているように見えてもそうではなく、正確には、横断的な分析結果の時系列的な比較による結果であり、あくまでも横断的な視角からの結果に過ぎない。しかし、本来の分析目的から言えば、たとえば、「階層帰属意識」の変化に何が寄与したのかを明らかにすべきであろう。このためには、本稿で試みたように、各時点における「階層帰属意識」を目的変数にして、要因の効果を個々の時点で見るとはならず、「階層帰属意識」の時間的な変化を目的変数にし、その規定要因を探さなければならない。なぜなら、時間的な構造変化は空間的な分布に投影されるとは言うものの、横断的な分析結果とその変化の要因とは必ずしも一致せず、横断的分析では無関係と見える変数が、視角を時点間の変化に変えた途端に有力な説明要因として浮かび上がってくるのが有り得るからである¹⁹⁾。この視角からの分析によって有益な結果を得るためには、同一サンプルを追跡する調査（パネル調査）は無理としても、少なくとも、「階層帰属意識」の変動の説明要因の有力な候補と見られる項目が継続的に調査されていなければならない。しかしながら、既に述べたように、SSM 調査には継続質問が少なく、この視点からの分析はほとんど不可能である。この視角からの分析を行なって初めて、たとえば「階層帰属意識は地位変数の効果に主観的な変数の効果が加味されることによって形成される」といったような、暗黙のうちに「階層帰属意識」の変動要因に言及した見解の当否についての、よりの確な議論が可能になるのである。これは今後に残された大きな課題である。

謝 辞

調査データの利用に際して便宜をはかっていただいた余暇開発センターの松田義幸氏、日本経済研究センターの武藤博道氏、日本消費経済研究所の上村淳三氏と、草稿に対して貴重なコメントをいただいた鈴木達三教授ならびに審査員の方に心から感謝します。

なお、この研究は、統計数理研究所共同研究 61-共研-23、62-共研-30 のほか、昭和 60 年度科学研究費補助金の援助に基づくものである。

注

1) 1975 年 SSM 調査は「社会階層と階層移動に関する調査 (A 調査)」と「職業威信調査 (B 調査)」の 2 本立てで行なわれ、前者は職歴、家庭環境、学歴、収入、社会的地位、財産所有状況、満足度などに関する 100 問以上の質問から成っている。ここでは、ブリ・コードの質問項目を中心に 73 の項目をとりあげ、「階層帰属意識」を目的変数、他の 72 項目を説明変数の候補とみなして CATDAP-02 を適用した。また、直井の分析は上の A、B 両調査を合わせたデータに基づいている部分もあるが、ここでは A 調査の回答者のうち、問 4 の「従業上の地位」で学生や DK (Don't Know の略)、NA (No Answer の略) という回答者と、問 26A の「世帯収入」で 2,025 万円以上の人や DK、NA という回答者、計 191 人を除いた 2,533 人を分析に付した。このようにデータを制限しても得られる結論に異なるところはない。

2) K 個の説明変数の集合 $\{I_1, \dots, I_K\}$ を I 、その任意の部分集合を J とおき、 I と J のとる値をそれぞれ i 、 j とおくと、 J が目的変数 I_0 に対してもつ情報の量は、モデル

$$\text{MODEL}(I_0, J): \quad p(i_0 | i) = q(i_0 | j)$$

の真の分布に対する近さで評価できるから、モデルの評価基準として赤池情報量規準 AIC を用いることにすると、所期の情報の量は、結局、次の統計量で評価できると考えられる。

$$AIC(I_0; J) = (-2) \sum_{i_0, j} n(i_0, j) \log \frac{n \cdot n(i_0, j)}{n(i_0)n(j)} + 2(C_0 - 1)(C_J - 1)$$

ここで、式中の記号は以下の意味である。

$n(i_0, j)$: 変数 I_0, J のとる値 (i_0, j) に関する同時観測度数
 $n(j)$: 変数 J に関する周辺度数
 C_J : 変数 J の総カテゴリー数

なお、どの変数も説明変数としてとりあげないことを $J = \emptyset$ と表すことにするとき、 $n(\emptyset) = n$, $C_\emptyset = 1$ と規約する。この統計量の値が小さいほど、よいモデル(この場合は有効なクロス表)とみなされる。赤池情報量規準 AIC の概要とそれに基づく数理統計学の再構成については坂元 他(1983)を、CATDAP の詳細については坂元(1985)を参照されたい。なお、上の統計量の値は、このままでは、サンプル・サイズの異なる異種データ間では比較できない。

この統計量を基礎に、カテゴリカルデータにおける最適説明変数の自動探索のために開発されたプログラムが CATDAP-01, 02 である。CATDAP-01 は最適説明変数の(多次元的)組み合わせを探索する FORTRAN プログラム(Katsura and Sakamoto (1980))であり、CATDAP-02 は最適なカテゴリー区分も併せて探索するプログラムである。このプログラムは、目的変数がカテゴリカルな変量であること以外には、適用上の制限条件はない。すなわち、説明変数の数、種類、サンプル・サイズ等の如何にかかわらず適用できる。なお、パソコンによる最適 2 次元クロス表探索のためには BASIC プログラム CATDAPJ(坂元 他(1988))も用意されている。

- 3) 分析者の経験や直観に基づく仮説がなければデータの収集さえ不可能であるから、そのような仮説を設定することの重要性はあらためて指摘するまでもない。直井の分析はこの意味で意義がある。しかしながら、分析対象の構造が詳しく解明されていない場合には、そのようなアプローチが常に成功的な成果をもたらすとは限らないばかりでなく、当初の仮説に対する過度の固執は皮相な見方を一方的に対象に押し付け、対象のもつ豊かな特性を押し殺すという愚を犯す危険もはらむ。

日本の世論や意識の動向は、もともと、決して把握しやすい現象ではないが、それでも、戦後から昭和 40 年代末のオイル・ショックに至る時期においては、国民の意識は等質的で、その動向も比較的容易に把握できた。これに対して、オイル・ショック以後の世論は、「新人類」、「柔らかな個人主義」、「国際化」、「高度情報化社会」などという現代用語にも象徴されるように、以前に比べ格段に多様化・個別化しつつあり、また、次々に予期せぬ事態が出来し間断なき構造変化を遂げつつある。このような時代にあっては、通説の微調整によつては、意識動向の予測はもとより、現状把握さえおぼつかない。

このような場合には、直観に基づく仮説の推定からデータによる検証へ、という一方通行的な認識過程だけではなく、データ構造の抽出から新たな仮説の提示へ、という逆方向の認識過程が不可欠である。これら両方向の認識過程を繰り返し、徐々に仮説を純化することによって、初めてわれわれは対象の本質に迫ることができる。統計的分析の場合、この後者の局面においては、いったん当初の仮説をぬぐい去って、虚心にデータの語るところに耳を傾ける作業が必要である。しかし、現実の社会調査データに対してこのような作業を行なうためには、少なくとも、つぎのようなことが考慮されなければならない。

- ① サンプル誤差の処理が可能であること
- ② 説明変数の次数やカテゴリー数の影響が評価できること
- ③ 説明変数がいくら多くても対処できること
- ④ 高次の交互作用の評価ができること
- ⑤ 説明変数の候補に連続変量が混在していても処理できること

このような条件を全て満たす作業を経験的な方法で遂行することはまず不可能である。このときにこそ、観測ノイズのみを排除して、データから有意な情報を自動的に抽出する統計的方法が積極的な存在意義をもつ。仮説検証的な統計解析手法ではなく、データの、本来の意味での、構造探索的な解析手法が不可欠である。CATDAP はこのような目的のために開発されたプログラムの一つである。

- 4) 表 3 の中段に示されているように、1965 年の調査でも、「階層帰属意識」と「階級帰属意識」とは関連が強く、互いに相手の有力な説明変数である。もっとも、「階級帰属意識」に対しては、回答者が「指導者層」・「経営者層」・「中間層」・「勤労者層」の 4 つの社会階層のどれに帰属するかを聞いた質問(「社会層」と略)が最有力な説明変数であるが、このことに関しては、つぎの点に注意する必要がある。まず、この関連の強さは、「社会層」を「勤労者層」とする人の 90% が「階級帰属意識」を「労働者階級」としたためにもたらされたものである。さらに、「指導者層」の人は「階級帰属意識」を「労働者階級」とする人が多いのに対して、「経営者層」や「中間層」の人は「階級帰属意識」を「中間階級」とする人

が多く、「社会層」の区分が1次元的でないとの見方も成り立つ（ここで、1965年SSM調査のみが「階層帰属意識」の「中産階級」という回答肢を「中間階級」としている）。

- 5) 調査の回数を I_1 、項目名を I_2 で表し、それぞれのとる値を i_k ($i_k=1, \dots, C_k, k=1, 2$) とするとき、これらの値が与えられた下での目的変数 I_0 の確率 $p(i_0 | i_1, i_2)$ は多項分布の $C_1 C_2$ 個の積で与えられ、パラメータ $q(i_0 | i_1, i_2)$ に無関係な定数項を無視すれば、

$$p(i_0 | i_1, i_2) = \prod_{i_0=1}^{C_0} \prod_{i_1=1}^{C_1} \prod_{i_2=1}^{C_2} q(i_0 | i_1, i_2)^{n(i_0, i_1, i_2)}$$

と書くことができる。ここで、 $n(i_0, i_1, i_2)$ は当該セルの観測度数を表す。このとき、項目 I_2 の第 m 回目の調査における効果は、モデル

$$\text{MODEL}(I_0; m, I_2): \quad q(i_0 | i_1, i_2) = \begin{cases} a(i_0 | i_1, \cdot), & i_1 \neq m \\ a(i_0 | m, i_2), & i_1 = m \end{cases}$$

で評価できよう。このモデルは I_0 に対する I_2 の効果を第 m 回目の調査に関してのみ許すことを表現している。このモデルの最大対数尤度は、

$$\sum_{i_0} \sum_{i_1 \neq m} n(i_0, i_1) \log \frac{n(i_0, i_1)}{n(i_1)} + \sum_{i_0} \sum_{i_2} n(i_0, m, i_2) \log \frac{n(i_0, m, i_2)}{n(m, i_2)}$$

で与えられるが、これはつぎのように変形することができる。

$$\sum_{i_0} \sum_{i_1} n(i_0, i_1) \log \frac{n(i_0, i_1)}{n(i_1)} + \sum_{i_0} \sum_{i_2} n(i_0, m, i_2) \log \frac{n(m) n(i_0, m, i_2)}{n(i_0, m) n(m, i_2)}$$

ここで、第1項は異なる m についてのAICの比較には寄与しない定数であるから無視することができ、最終的なAICはつぎのようになる。

$$\text{AIC} = (-2) \sum_{i_0} \sum_{i_2} n(i_0, m, i_2) \log \frac{n(m) n(i_0, m, i_2)}{n(i_0, m) n(m, i_2)} + 2(C_0 - 1)(C_2 - 1)$$

これは、実質的に、第 m 回調査のデータを単独のデータ・セットと見て適用された場合のCATDAPの、注2)に示した基礎統計量にほかならない。したがって、特定時点の調査結果に対してCATDAPを適用して得られたAICの値は、特定時点における項目の効果測定し、全調査期間を通じて比較可能な尺度として、そのまま用いることができる。

- 6) 「東京定期調査」(第51回調査)の概要は、調査主体：統計数理研究所、調査時期：1981年12月、調査対象：東京23区の有権者、調査方法：個別面接聴取法、サンプル・サイズ：568である。また、第52回調査は、同じ要領で、翌1982年11月に行なわれ、サンプル・サイズは504であった。なお、この調査そのものは、昭和29年(1954年)から昭和57年(1982年)まで、毎年、春と秋の2回、東京23区の有権者を対象に、これまで計52回実施された。継続質問による調査を主目的とした調査であるが、「階層帰属意識」の質問は早い時期にはんの数回しか行なわれていない。
- 7) 「日本人の国民性調査」(第7次調査)の概要は、調査主体：統計数理研究所、調査時期：1983年9月～12月、調査対象：全国の有権者、調査方法：個別面接聴取法、サンプル・サイズ：2256(K型調査票)、2173(M型調査票)である。なお、この調査の「階層帰属意識」の回答肢は、SSM調査とは異なり、上、中の上、中の中、中の下、下の5段階である。また、この調査は、昭和28年(1953年)以降、5年おきに、7回実施され、結果は『日本人の国民性』(第1～第4、至誠堂)で報告されているが、第7次調査の結果報告書は未刊である。
- 8) ある程度の有効性をもつ説明変数として、応接セットの有無が、本節に限らず、随所に現れる。一般に、原因系の不明な現象の説明をめざすとき、その成否は視角的的確さに懸かっている。統計的な現象解析では視角は変数、あるいは標識ということになろう。どんな質問も標識にはちがいがいないが、その含意は、質問によっては勿論、同じ質問でも状況によって、まるで違う。たとえば安定期の社会における年齢の違いは単に生存時間の長さの違いしか意味しないであろうが、戦後の日本のような激動期の社会における年齢の違いは、貧困と豊かさ、混乱と安定等、要するに社会的な背景をまるごと反映した違いになる。同様に、応接セットの有無も、特定の時期や社会においては、ライフ・スタイルや住居の差など、個人の社会的な地位の差を表すかなりよい指標であるということであろう。ついでながら、例えば「階層帰属意識」を問題にするなら別荘の有無はもっとよい指標だという指摘があるかもしれない。しかし、これは明らかな誤りである。とい

うのは、確かに、別荘をもっているか否かで「階層帰属意識」は大きく違おうであろうが、別荘をもっている人の構成比率が小さければ、「別荘があるか否か」による分類は、統計的には、結局は社会集団に対して分類(分割)という操作を何も施さなかったこととほとんど同等であるからである。現にSSM調査にはこの項目が採用されているが、現在のところ、たいした効力はもたない。「階層帰属意識」に対しては、今の場合、別荘の有無より応接セットの有無の方が有効なのである。有限個のデータから観測ノイズ(通常はサンプリング誤差)を除去して現象の有意な特性を抽出することを課題としてきた統計学においては観測数(データ数)の情報は解析結果を本質的に規定するのである。

- 9) 「価値意識調査」の概要は、調査主体：統計数理研究所，調査時期：1984年2月，調査対象：関東地方1都6県の有権者，調査方法：自記式，サンプル・サイズ：1304である。なお、「階層帰属意識」の回答肢は「日本人の国民性調査」と同じである。
- 10) 「消費者の意識と行動調査」(第7回調査，第10回調査)の概要は、調査主体：日本経済新聞社・日本消費経済研究所，調査時期：1983年6月と1984年6月，調査対象：首都圏30km圏内の有権者，調査方法：個別面接聴取法，サンプル・サイズ：890(1983年6月)，840(1984年6月)である。なお、この調査の「階層帰属意識」の回答肢も、SSM調査とは異なり、上、中の上、中の中、中の下、下である。
- 11) 統計調査環境悪化という状況を考え、これらの経済項目の回答の安定性を懸念される向きもあるかもしれない。ところが、実際に6ヶ月後に同一サンプルに対して同一質問で再調査した結果によると、年収、貯蓄総額、月間生活費等の経済関係項目の安定度は極めて高かった。世論調査の数値での回答結果は信憑性がないとする見方があり、この見方からすれば、この知見は意外な感じを与えるかもしれない。確かに、統計調査環境の悪化は回収率の低下をもたらし、大きな問題になっているが、そのことが、回収された回答結果の質の低下に帰結するか否かについては、少なくとも、再検討の余地があるのではないと思われる。なお、意識項目の中では「くらしむき満足度」の安定度が抜群で、くらしむきの過去との比較や予想の安定度は低かった。
- 12) 「13カ国価値観調査」の概要は、調査主体：余暇開発センター，調査時期：1979年9月～11月，調査対象：13カ国についての全国調査(ただし、ブラジル、インド、韓国については都市部調査)，調査方法：個別面接聴取法，サンプル・サイズ：各国約1,000(具体的には、表5の表頭の国名横のカッコに注記)である。なお、この調査の日本語と英語の質問文はそれぞれ以下のとおりである。

“社会の人々をこのカードにあるように5つの階級に分けるとしたらあなたはどれにあたると思いますか。

1. 上 2. 中の上 3. 中 4. 中の下 5. 下”

“If people in the society can be divided into 5 classes as shown on this card which class would you say you fall under?”

1. High 2. Upper middle 3. Middle 4. Lower middle 5. Low”

- 13) 林((1984), pp. 138-143)は、高血圧患者に減塩させると血圧が下がることはよく知られているにもかかわらず、実際の横断的な疫学調査でそれを立証することができなかった例に関連して、次のような人工例を用いてその原理を説明している。

いま、「高血圧か否か」と「塩分摂取量」との関係を見るために、ある集団で(減塩指導前に)調査したところ、表6の結果が得られたとする。この表は「高血圧か否か」と「塩分摂取量」とが独立であることを示している。そこで、減塩指導を行なったところ、以下のような効果が見られたとする。

減塩指導前	指導後
(多塩, 高血圧) 400人	→ (少塩, 非高血圧) 320人 (少塩, 高血圧) 80人
(多塩, 非高血圧) 200人	→ (多塩, 高血圧) 80人 (多塩, 非高血圧) 120人
(少塩, 高血圧) 200人	→ (少塩, 高血圧) 200人
(少塩, 非高血圧) 100人	→ (少塩, 非高血圧) 100人

もし指導後に調査したとすると表7の結果が得られることになるが、この表は「高血圧か否か」と「塩分摂

取量」が、依然として、独立であることを示している。こうして、林は、横断的な調査では減塩の降圧効果を示すことができないことがある、と指摘している。

因に、この例で用意された情報から減塩の降圧効果を明らかにすることができない訳ではない。この例で実証すべきことは、減塩が降圧効果をもつか否かであって、塩分摂取量の多寡と高血圧か否かとの関係ではない。それにもかかわらず、上の例で実際に検討しているのは後者である。分析手続きが分析目的に見合っていないのである。目的に見合った分析を行なうためには、降圧、すなわち血圧が下がったか否かを目的変数にするとともに、減塩、すなわち塩分摂取量の変化を説明変数にして両者の関係を見なければならぬ。上の例では、塩分摂取量の変化と血圧の変化という時間的な変化についての個人情報、いわばパネル調査の情報が与えられているから、この情報を用いて、この観点から実際にクロス表を作成すると表8が得られる。この表は、減塩したグループでは80%に降圧効果が見られたのに対して、減塩しなかったグループでは一人も降圧効果が見られなかったことを示している。減塩が降圧効果をもつことは明瞭である。このことは、分析目的に即応した変数の設定、つまり分析目的と同等の変数の設定がいかに重要であることを示している。

ところで、この例の場合には、単に、変数のとり方を分析目的に合わせて変更するだけで解答を得ることができたが、個人の時間的な変化を示す(パネル調査の)情報がなければ問題は簡単ではない。現実の場面でパネル調査を実施することは困難であるが、その場合でも、分析目的を明確に意識しておれば、たとえば「過去どうであったか」についての質問(回顧調査)を用意することによって個人の時間的な変化についての情報を得ることは可能であろう。もちろん、回顧調査の結果は2時点で実施した2つの調査から得られた結果とは異質のものになってしまう可能性もつつが、検討してみる価値はあると思われる。これらの情報がない場合には減塩の降圧効果を析出することは、原理的には、不可能である。というのは、これを明らかにするには、基本的には、「高血圧か否か」と「塩分摂取量」のそれぞれについての減塩指導前と指導後の情報が、いわば4つの変数で規定される4次元分布の情報が与えられていなければならないからである。にも

表6. 「高血圧か否か」×「塩分摂取量」(減塩指導前)

			血 圧		計
			高 血 圧	非高血圧	
塩	多	塩	400 (67%)	200 (33%)	600 (100%)
	少	塩	200 (67%)	100 (33%)	300 (100%)
計			600 (67%)	300 (33%)	900 (100%)

表7. 「高血圧か否か」×「塩分摂取量」(減塩指導後)

			血 圧		計
			高 血 圧	非高血圧	
塩	多	塩	80 (40%)	120 (60%)	200 (100%)
	少	塩	280 (40%)	420 (60%)	700 (100%)
計			360 (40%)	540 (60%)	900 (100%)

表8. 「降圧」×「減塩」

			血 圧		計
			降圧した (高→低)	降圧せず (高→高, 低→低, 低→高)	
塩	減塩した (多→少)	320 (80%)	80 (20%)	400 (100%)	
	減塩せず (多→多, 少→少, 少→多)	0 (0%)	500 (100%)	500 (100%)	
計			320 (35%)	580 (65%)	900 (100%)

かかわらず、表6や表7はこの4次元分布を別々の2次元空間に射影したクロス表に過ぎないからである。横断的な分布から時間的な変化を含んだ分布の推測、つまり2次元確率分布から4次元確率分布の推測は一般には不可能である。もちろん、たとえばこの例の場合に、「高血圧」は600人から360人に減少し、他方で「多塩」も600人から200人に減少したというように、横断的な調査結果の周辺分布の異時点間の比較によって、高血圧と塩分摂取量との集団としての共変関係を見ることはできる。ただ、このことから個人レベルでの減塩の降圧効果は導けないのである(たとえば、減塩と降圧効果とは独立という仮定の下でも表6から表7は導けるからである)。注意すべきは、同一質問が継続して調査されていないとこのことさえも不可能であるということである。

参 考 文 献

- 林知己夫(1984). 調査の科学, 講談社.
- Katsura, K. and Sakamoto, Y. (1980). CATDAP, a categorical data analysis program package, *Computer Science Monographs*, No. 14, 1-73.
- 岸本重陳(1978). 「中流」の幻想, 講談社.
- 村上泰亮(1984). 新中間大衆の時代, 中央公論社.
- 直井道子(1979). 階層意識と階級意識, 日本の階層構造(富永健一編), 東京大学出版会, 365-388.
- 坂元慶行(1985). カテゴリカルデータのモデル分析, 共立出版.
- 坂元慶行(1988). 最適なクロス表の選択, パソコンによるデータ解析(赤池弘次監修), 朝倉書店(プログラムのソース・リストは同書もしくは坂元慶行・中村 隆・桂 康一による同書店からの別売ソフトを参照されたい)(印刷中)
- Sakamoto, Y. and Ishiguro, M. (1984). Bayesian binary regression involving two explanatory variables, *Ann. Inst. Statist. Math.*, **37**, 369-387.
- 坂元慶行, 石黒真木夫, 北川源四郎(1983). 情報量統計学, 共立出版.
- 1980年国際価値会議事務局(1980). 13カ国価値観調査データ・ブック.
- 富永健一編(1979). 日本の階層構造, 東京大学出版会.

What Makes the Difference in Social Stratum Identification?

Yosiyuki Sakamoto

(The Institute of Statistical Mathematics)

The fact that 90 percent of Japanese consider themselves middle or upper stratum has been widely reported and has been taken for an indicator of the improving standard of living in Japan. However, the report of “the survey in 13 countries of human values” pointed out in 1979 as follows: “This tendency is not limited to Japan, but is evident around the world. The total percentage of those considering themselves in the high, upper-middle and middle class was about 70 percent in Japan. In the Philippines and India, however, it was even higher, 75 and 71 percent respectively.”

The purpose of the present paper is to clarify what makes the difference in social stratum identification in Japan. For this purpose, we applied CATDAP, a program which performs variable selection for categorical data, to many sets of social survey data. Through such analyses of all of the data sets obtained in Japan it was found that our social stratum identification was subjective rather than objective. On the other hand, from the analyses of data of “the survey in 13 countries”, we found that this feature was limited to Japan.